

障がいのある人たち
チャレンジの
過去に思いを馳せ、現在を見つめ、未来に希望を託す
傑作ドキュメンタリーの誕生!



Message

「どんなに医学が進歩しても人間の2%から3%の人が知的障がいのある人として生まれてくるのです。それは、神様が私たちに優しさと思いやりの心を教えてくれるために贈ってくださったのです。」
これは、私が30年以上前にある牧師さんからお聞きした話です。
このお話を聞いた時から、私の人生は、変わりました。

製作総指揮 細川佳代子

長崎県雲仙市で暮らすプロの和太鼓チーム《瑞宝太鼓》のメンバーは、知的障がいがある。彼らは日本ではいち早く大型の授産施設を廃止した先進的な福祉事業団の利用者で、それぞれがグループホームや家庭を持って暮らしている。プロの和太鼓奏者である彼らの毎日は、太鼓を打つことが仕事で、日本国内のツアーだけでも、年に100を越す公演をこなす、その活動は海外にも及び、アメリカの桜祭りの舞台や国連本部などでも演奏を披露してきた。

彼らは2017年10月にフランスのナント市で開催された障がい者の芸術祭に参加した。フランスでも最大級のクラシックコンサート会場、シテ・デ・コングレ（Cite des Congres）で開催された彼らの演奏会は、大成功をおさめ、多くの人々の賛辞と拍手に包まれた。それは、彼らが障がいを超えて太鼓を演奏したことへの賛辞にとどまらず、観客の人々が純粋に音楽の芸術性に感動したことへの表れだった。正に会場にいた皆が、この太鼓演奏によって真の意味でのインクルージョン（包み込む共生社会）を体現できたことへの喝采だったのだ。

障がいのある人が幸せに輝ける社会で暮らすことのできる社会作りは、世界中の先人がこれまで様々な試行錯誤をしてきた。そこには悲しい歴史もあった。19世紀に生まれた優生学をネガティブに捉えた人々の思想が、20世紀に入って、障がいのある人々へ偏見と差別の時代を作り出した。ナチによるT4作戦と呼ばれる障がい者への殺戮は、その象徴的な出来事だった。第二次世界大戦後にノーマライゼーションの考え方が生まれた北欧においてさえも長い隔離政策の時代があり、その本拠地となった収容型の大型施設は、つい十数年前まで世界中に存在してきた。やっこの四半世紀、様々な人々の叡智と行動によって変革が起き、世界の情勢は変わってきた。しかし、現在でも生き生きと暮らすことを阻む施設が残っている国は、多くある。

今は地域の人々の温かい支援に包まれ、生き生きと暮らしていても、たった数十年ほど前には、暮らしたいと思う地域に生活することすら歓迎されず、障がいのある本人にとっても社会にとっても、困難な存在として排除されてきた。そのような日々から、懸命な努力で今の姿を作り上げてきた彼らの行動を見つめようと思う。

瑞宝太鼓と同じように、自らの道を切り開き、堂々と活動をする人々も多い。フランスのヒップホップグループ・アーティビックやベルリンの演劇集団ランバ・ツェンバの人々、さらに知的障がいのある人として生きる権利を自らの力で確立すべく、国会議員を目指すスウェーデンの女性など、そんな輝く活動を見つめ、いま、私たちの社会が進もうとしている可能性への姿を、多くの人々とともに、心の奥に強く描きたい。

監督 小栗謙一